

## ゾロ目

会社の休憩時間に、僕は同僚と近くのスーパーに軽食を買いに来ていた。

もうすでに残暑などという言葉を使うような時期はとうに過ぎているにもかかわらず、肌をひりつかす様な日差しとむせかえるような湿気にその時はまいていたのだ。

とりあえずのどの渴きを癒す飲み物と、少し小腹がすいていたので何か軽い食べ物を買おうと、僕はブラブラと店の中を見て回っていた。

「えっと、これっていくらなのかな…」

などとい独り言を言いながら、菓子パンを手に値札を探す僕を見て同僚がった。

「お前ってさ、いつも値段を計算しながら買い物してるよな。」

値札のない菓子パンを棚にもどしてから同僚の方をむいて僕は答えた。

「えっ、それって普通だろ。おまえ値段も見ずに買い物してるのか？」

同僚は僕の返答を受けて少し考えるような、何かを思い起こすような風な顔をして言った。

「えっと、そうじゃなくて、なくはないけど・・・、ていうか、俺も値段はみるよ、みんな見る、きつと。でもさ、いちいち全部計算してるだろ、お前。レジに行くときにはすでにいくら払うか分かってるよな。そういう奴ってあんまりいないだろ・・・たぶん。」

「ふうん。なんでオレにそんなに興味があるのか知らんけど、ちょっとした理由があるんだよ。」

見られてると思うとちょっと気持ち悪いけど、その理由話してやろうか？」

「理由があるんだ？ 見てねえし、興味もないけど、話がしたいのなら聞いてやるよ。なんでなの？」

パンの棚から離れて、おにぎりを探しながら僕は話し出した。

「最初のそれは、半年ぐらい前だったと思う。」

会社の帰りに家の近くのコンビニで夕食の弁当を買ったんだ。

レジで会計をしてくれた店員さんはその時が初見のヒトで、若い女性だったんだけど、なんだか華がないっていうか、青白い顔の生気のないヒトだった。で、そのヒトがピッピッて入力して、

『777円です・・・』  
って言ったんだ。

おっ、ゾロ目か、ラッキーとか考えてたと思う。

そしたらその店員さんが、下から、こう、オレの顔を覗き込んで

『おめでとうございます。』

って、ちょっと笑いながら言ったんだよ。いや、その笑顔がさ、怖かったんだよね。なんともいえない感じで。」

そうやって同僚の方をみると、なんとも困惑気味の顔をしている。

「それって何の話なんだよ。その女の店員さんとうにかなっただって話か？」  
僕は答える。

「いや、その女のヒトはその後すぐ、その店を辞めたみたいで、いなくなったよ。」  
そして話を続けた。

「それから2・3週間ほどして、たしかS市に出張に行ったときだった。

例のごとく商談が長引いて昼飯の時間がとれなくて、商談が終わった帰り道におにぎりかなんか買おうと思って、目についたコンビニに入ったんだ。

で、おにぎりとお茶とチョコレートかなんか買ったのかな。

そしたら、666円ですって・・・。」

僕は立ち止まって同僚の方をみた。

「ま、あるわな。別に、おかしい事じゃない。」

「そう、別にオレもなんとも思わなかったよ。そのときはね。」

で、そのコンビニを出て二・三十メートルほど歩いたところで突然後ろから肩をたたかれたんだ。

『ヨッ、おめでとう』

ちよつとガタイのいい、三十歳前後のサラリーマン風の男が、そう言ってそのままオレを追い越して行ってしまった。

体育会系風でさわやかな感じだったな。」

僕はスパムおにぎりを手に取り値段を見ながら同僚の反応を待った。

「・・・ないか、あるかなしかと言われたらなしか・・・いや、全くのなしでもなくね？」

「まあな。そんな感じになるよな。オレもそんな風に考えた。なしよりのありだっただけ感じ？あのコンビニでオレのことは見てたのかも・・・とか、まあそれも変っちゃあ変だけど、なくはないかな、とかな。」

スパムおにぎりを食べるほどお腹が空いてるわけじゃないなと思った僕は、またスパムおにぎりを棚にもどした。

「その後、なんとなくの気味の悪い感じはあったけど、だからと言ってなにがどうといったこともなく、しばらくそのままなんにもなかったんだ。

そうしてそれから2ヶ月ほどして、もうそのことも忘れかけてたときに出たんだよまた。555円ですって。」

同僚は僕について回るようなカタチになっていたので、まだ何も手にしていなかった。

「3ヶ月前ってことか。」

「そこはまた会社からの帰り道にある家の近くのスーパーだったんだけど、  
(うわっ、出た)

とか思っさ。

もう夜になって暗かったりもしたから、ずいぶんと緊張したよ。

でもまあ無事に何事もなくうちであるマンションには着いたんだ。  
少しホッとしてエレベーターを待ってた。

上の階からエレベーターが降りてきて、扉が開くと、おばあさんが立ってた。  
そのおばあさんはうつろな顔して下のほうをみてたんだけど、すっとオレをみてニッコリ  
笑って、言ったんだ。

『おめでとうございます。』  
って。

そうしてまたうつろな顔にもどって、よたよたとオレの横を通って行ってしまった。」

「怖っ、なにそれ、知ってる人？」

同僚がきく。

「見かけたことはあるよ。でもあんな感じじゃなかったな。

まっ、それでなんだか怖くなったっていうか、気持ちが悪くなったっていうのかな。  
とにかくそれ以来ゾロ目にならないように計算して勘定してるってわけ。」

そう言いながら僕は清涼飲料水とチョコレートバーを手にとって、ゾロ目にならないよう  
に計算して、レジで勘定してもらった。

ピッ、ピッ と、レジのお姉さんが商品のバーコードを読み取る。

「怖いねそれ。そりゃ怖いわ。まあ、計算するようになるかも……。

あっ、これも一緒で。」

あわててついてきた同僚が横にあった缶コーヒーを取ってレジに置いた。  
ピッ。

「444円です。」

えっ？ 少しのあいだ思考停止におちいった僕に同僚は、

何事もなかったような顔で、でも口元だけでニヤリと笑ってこう言った。

「あれっ、ゾロ目じゃん。 おめでとう」